
ある朝散歩道の踏み切りで

川崎真人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ある朝散歩道の踏み切りで

【Nコード】

N1004T

【作者名】

川崎真人

【あらすじ】

すんげえ田舎者の自分ですが、住んでるとこは好きです。田んぼとか時代遅れの汽車とか、インスピレーションをもらうことがあります。

それを活かして作りました。

（前書き）

アクセスありがとうございます。

空が溶け出しそんな朝焼けだった。

柔らかい涼しさと時が止まったような景色の中、ぼくは二年ぶりになる朝の散歩を楽しんでいた。線路沿いのサイクリングロードを頭を空にして歩いていると、見るもの全てがベッドで見る夢の続きのように感じられるから不思議なものだ。

そんなことをしても意味はないのだけれど、つい時間を確認してしまう。もうすぐ、いつものあの貨物列車が、これから差し掛かる踏み切りを通過する時間だった。

サイクリングロードを過ぎて少し歩くと、いつも通っているその踏切が見えて来た。そこでもう一度時間を確認。いつ踏み切りの音がなり始めてもおかしくはない、というところだ。

だからと言って急ぐつもりもない。踏切を待つ時間というものも、この朝に限っては悪くないものなのだ。そう思っのんびり歩いていると、ぼくは踏み切りの前で膝を抱える小さな影に気付いた。

花柄の、おそらくはパジャマを着て座り込んでいるのは、子供のようにな小さな影だった。何かを待つようにちよこんと座っている。踏み切りの音が鳴っている訳でもないのに、ぼくは首を捻った。

そう言えば、ぼくも小さな子供の頃、同じようにここに座り込んで、列車が来るのを待っていたこともあったっけ？

確か、悪戯を一つ思い付いたからだ。無人駅に停まった列車を利用した、ちょっとした大作戦だったのである。成功しているのかどうかここで見張っていたのだけれど……。ほろ苦い、しかし楽しい思い出である。今にして思えば、良くもあんな暢気でいられたものだ。

線路は大きなカーブを描いていて、踏み切りを過ぎた後の列車は転びそうに過ぎ去って行く。なので、ぼくは自分の計画の浅はかさをこの目で思い知らされる結果となり、結果としてぼくはこの世間

から二年ほど隔絶されることとなった。

この子は自分と同じことを計画し、そして成功を見守っているのかな？　ぼくは思い、そして踏み切りの前まで来た。近付いてみると、その子が中学生くらいの女の子だということが分かる。つまらなさそうな表情で踏み切りを見詰めている。ぼくが隣にいるのに気付いて、怪訝そうに声をかけて来た。

「行かないんですか？」

風鈴のような声だった。端正な顔に、少し乾燥した髪の毛。朝にふさわしい眠そうな瞳でこちらを見詰めて来る。それは興奮した子供の顔ではなかった。だが大人びた表情というには、どう考えても少女らしい柔らかさが過ぎる。

「ここでちょっと話をさせてもらっても良い？　それとも、やっぱり行った方が良いのかな？」

ぼくの言葉に、女の子は驚いたような顔をした。ぼくはつい頬を綻ばせてしまう。女の子はしばし可愛らしい思案顔で眉を潜めた後、ゆらりと立ち上がってぼくと相對する。偉く痩せた体。長い手足にはいくつか痣や火傷を作っていた。背丈は　ぼくの肩までなかった。「どうしてこんな踏み切りに？」

「列車が来るのを待っているのです」

女の子は眠そうに言った。ぼくは肝を抜かれたような気持ちになった。

どうしてこう、悟ったようなことを言えるのだろう。

「こんな朝早くに、どうしてそんなことを？　お父さんとお母さんは？」

「お父さんは、知りません」

女の子は少し笑ったようだ。

「お母さんは、もしかしたらもうすぐ会つのかも知れない。かな？」

悪戯っ子のように微笑む。ぼくにはその意味が分かった。

「その首についた痕は？」

ぼくが訊くと、女の子は少し困ったように

「こうすると、良く眠れるから……」

怖いことを言う。ぼくは少し笑った。それに気付いて、女の子は頬を膨らませたようだ。感じの良い、可愛い子だな。それに頭も良い。ぼくはついそんなことを思った。

「それじゃ。手にも同じような痕があるのは？」

女の子は膨れっ面のまま

「ちよつと強く締めすぎたんです。こんなはずじゃありませんでした」

「そうか」

その物言いに、ぼくは少し苦笑する。

「良かったじゃないか」

女の子は口をぱくぱくとさせた。それから

「良くないですよ」

むつとしてそう言った。

ぼくとは違う。そう思った。

踏み切りの音が鳴りはじめる。そしてぼくは何も言わなくなった。女の子はそわそわと線路の方を見詰め、降りて来た踏み切りを目で追い、それからぼくの方を向いて、落ち着かなくこう口にした。

「あの。ちよつと後ろ向いてくれませんか？」

「後ろつて」

「線路の逆」

「どうして？ 確認しただろう？ 下からじゃ絶対分らない」

女の子はぎょつとした顔になる。

「分かったよ」

言うつと、ぼくは女の子に言われたとおりに後ろを向いた。がたんがたんと列車がやって来る間抜けな音。いつもならけばけばしいだけのそれすらも、この静かな朝にふさわしいもののように、ぼくには思えた。

風圧と走行音。列車が通ったのだ。ある程度の音や気配は、きつ

とそれに紛れてしまうことだろう。列車が通り過ぎたのを知って、ぼくは女の子に話しかけた。

「もう良いかい？」

しばらく返事がなかった。大丈夫かな、と思っていると、女の子は存外落ち着いた声で

「ええ。もう、良いですよ」

なんて、諦観したように言った。

なんだか、それは少し魅力的だった。

振り向いた。線路の脇に横たわっていたのは、紫の舌と血走った目を飛び出させた、老婆のような女だった。女の子はそれを、どこか諦めたような、かすれたような微笑みを浮かべ、見守っていた。

やっぱりこの子は、ぼくと良く似ているんだ。

「大変だったね」

ぼくは言った。女の子は黙って頷く。

「これからどうするんだい？」

女の子は首を傾げた。それから透明な目でぼくの方をしばらく見詰めて、何かを確信したように「うん」と頷くと、照れたような笑顔でこう言った。

「次の列車を待ちましょう」

「それが良い」

ぼくは何度も頷いた。

「それまで、ここにいてやろうか？　ぼくにはまだ、時間がたくさんあるんだ」

言っと、女の子は唇を大きく歪めると

「殺しちゃいますよ？」

悪戯っ子のようにそう答えた。

(後書き)

読了ありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1004t/>

ある朝散歩道の踏み切りで

2011年10月7日07時36分発行